



Title	対象者の声を聴き、持続可能な医療の実現へ
Author(s)	新福, 洋子
Citation	目で見えるWHO. 2022, 81, p. 18-19
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/89674
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

対象者の声を聴き、 持続可能な医療の実現へ

タンザニアでの母子保健研究

私はこれまでタンザニアのフィールドワークを主体として、現地助産師への教育や農村部の妊産婦への集団指導を行い、その評価研究をしてきました。タンザニアは妊産婦死亡率が日本の百倍以上高く、母子ともに出産リスクが非常に高いのですが、私が大学院生の時にタンザニア農村部の医療現場を目の当たりにして、助産ケアの質を改善し、妊婦と家族にも教育を行うことで、出産リスクを下げられるのではないかと考えたことがきっかけです。最初は出産した直後の女性にその出産体験をインタビュー調査しました。その結果に基づき、女性の出産ストーリーをベースに教材を開発しました。出産に関する準備度の向上や合併症などの予防に一定の効果が認められたため、助産師教育に発展させようと、教育コンテンツに2016年/2018年のWHOの妊娠・出産に関するガイドラインを加え、助産師の目線で、助産師が使いやすいよう



広島大学副学長(国際広報担当)
大学院医系科学研究科国際保健看護学教授

新福 洋子

助産学研究者。イリノイ大学シカゴ校博士課程修了。WHO「世界の卓越した女性の看護師・助産師リーダー100人」に選出。Global Young Academy会員。日本学術会議連携会員。

に「WHY(なぜそれが必要か)」と「HOW(どのように臨床で用いればよいか)」を説明する形でまとめました。国中に広めるために、タンザニアで使用の広がっているスマートフォンアプリ教材に応用し、どこからでもアクセスできるようにしました。助産師を対象にパイロット試験をしたところ、助産師の知識や認識は上がるのですが、妊婦の出産準備度には十分な影響が見られなかったため、次に妊婦さんに直接情報が届けられるアプリを開発し、実装研究を行なっています。

アプリにはSNSのように「いいね」を付けたりコメントできる機能があるため、最初の助産師対象のパイロット試験の際は、私もコメントが来ると日本から

コメントを返していました。そのことが現地の助産師にとっては楽しく励みになったようで、非常に熱心に勉強を続けてくれました。こうした「誰かとつながっている」感覚が、インターネットを介した学習には重要であることを実感しました。

また、タンザニアには若年妊娠が多く、進学しても途中退学になってしまう少女たちと出会い、どうにかできないかと思っている時にNPO法人Class for Everyoneに誘われ、NPOとして若年妊娠予防のための思春期教育を開始しました。活動を広げるためにクラウドファンディングでプロジェクトカーを購入し、移動図書館も開始しました。その後



タンザニア農村部での思春期教育の様子



助産師たちと共に製作したアプリ



研究室ミーティングの様子①



研究室ミーティングの様子②（著者右）

JICA 草の根技術支援事業に採択され、包括的性教育を含んだジェンダー平等教育にも取り組んでいます。事業では若年妊娠を経験した女性を教育担当として雇い、彼女らの将来につながる支援も行なっています。教育を受けた思春期の少女・少年たちの認識や行動がどう変わったかを調査しており、論文にまとめています。

私が最も大切にしていることは、現地の人々の持つ経験や知恵を理解し、その価値観に沿った医療について考察することです。海外に日本の医療をそのまま持っていくことも、善意のお節介になってしまふこともありますし、研究のためだけにデータをいただいて、現地に何も還元できないというのは研究者のあり方として相応しくないのではないかと思います。時間がかかったとしても、対象となる人々の声を十分に聴き、現地のパートナーと協働することで、最終的に現地に根付くような介入方法や、世界に共有できる知見を生み出していきたいと思っています。

私の研究室に来る学生 / 院生さんには、そうした研究者としての責任を理解して欲しいと思います。それを理解できる人であれば、調査地やトピックは厳密には問いません。どんな研究に新規性があり、現地にとって重要で、研究として取り組むのにふさわしいか、一緒に考えていきます。

現在、現地の人々から学び、文化への理解を重要視したフィールド調査に加え、Demographic Health Survey (DHS) を用いた大規模データベース研究も行っています。特に新型コロナウィルス感染症禍で海外渡航が難しい現在、そうしたデータベース研究は非常に有益です。本研究室では、取り組みたいリサーチクエッションに合わせて量的アプローチ、質的アプローチのどちらの調査方法でも研究することができます。

広島大学大学院は入学すると指導教員に加え、2名の副指導教員を決めるのですが、外部の教員に副指導教員をお願いすることも許可されているので、トピッ

クによって海外の先生方に指導をお願いすることもあります。研究室に現在エジプト、中国、バングラデシュ、タンザニアからの留学生もいますので、日本にしながら異文化の人々と学び合う経験を積むことができます。学部生にも2年次に Nursing in Global Health という授業を行っており、4年生からゼミに配属されます。興味のある学生には学部生時代から勉強会や研究室に関わってもらっています。

将来開発途上国で働くことに興味がある、世界の健康格差是正のために尽力したいと思っている、世界のどこにいても適切な医療にアクセスできる環境を作りたい、そのための礎となる研究がしたいと思う人は、ぜひ研究室のホームページをご覧ください、お問い合わせいただければと思います。皆さんの思いや夢を応援します。

研究室ホームページ
<http://globalhealthnursing.com/>